

白山ふるさと文学賞

第十四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年 小説の部 最優秀賞

「私の夢見た魔法使い」

東明小学校六年

前川まえかわ

葵あおい

ジージージー…ミーンミン…

「あー！や、やばーーー！お母さんどうしよう。」朝から大騒ぎしているのはこの私、西山姫花と申します。大騒ぎしているその理由は、今日が夏休みの最終日なのに宿題が一つ残っているからです。その宿題の内容は「将来の夢」というものです。私の夢は魔法使いになることです。でも、夏休み前にクラスの子に言つた時には、

「魔法使いなんてアホらしい」と言わされました。先生も、

「そんな仕事無いからなあ。」

と困つてしましました。そして家族も

「もつと現実的な仕事にしたら？」

と言つてきます。

「何で、魔法使いを夢みたらダメなのかなあ？」

お母さんに聞くと、
「魔法使い」という職業なんてないからねえ。」

と言われました。でも私は、諦めたくありませんでした。どれだけ考

えて、他の仕事なんて興味が持てませんでした。

その晩、頭の中でぐるぐると夢のことを考え続けていました。私は神様にお願いしました。「魔法使いになりたい！」と。丁度そのとき、振り子時計が九回鳴つて、夜中の十二時をつげました。

七日後：

夕方の風を浴びて屋根の上でのんびりしていると、どんどん眠くなつてきました。うとうとしていると、ほほに冷たいモノがあたり、パチンと割れました。

「あれっ、シャボン玉が降つてきた。だれか近所の子があそんでいるのかなあ？」

しかし、突然ひときわ大きいシャボン玉が私を包み込みました。次の

瞬間、私は空に浮かんでいました。最初はびっくりしましたが、すぐに楽しくなつてきました。

「わあー！空を飛べる日が来るなんて！」

ワクワクして周りを見渡していると、目の前に魔女服を着たおばあさんが現れました。私は自分のほっぺたをギューッとつねりました。

「あつ、めっちゃ痛い。つてことは、夢じやない。魔法使いは、本当にいるんだ!!」

私がシャボン玉の中で、喜んで大暴れしていると、

「そんなに大暴れしないでおくれ。シャボン玉が割れてしまうよ。」と、おばあさんに言われてしましました。

「す、すみません…」

そう私は言つたけど、心の中のワクワクを隠しきれませんでした。するとおばあさんが、

「あんた、何でそんなにワクワクしているのかね？」

と、聞かれてしました。

「いやあ、魔法使いに会うのは夢だつたので！」

と、ハキハキ言うと、おばあさんが、大笑いしました。

「おまえは面白い子だねえ。気に入つたよ。さあ、行くよ！」

と言われて、私はビックリしました。

「行くつてどこへ?！」

「あつたり前じやないか。魔法使いの修行だよ！」

「えええ!?」

私は心臓が止まるぐらいビックリしました。それと同時にワクワクする気持ちが爆発しました。

ヒューッン！ドスン！

「さあ、ついたよ！」

私は目が回つてしまつて、すべてが歪んで見えました。しばらくする

と、ようやく周りが見えてきました。そこは、あたり一面不思議なモノに、囲まれていました。一部のモノにはタグが付いていて、『仲直り魔法の使い方』とか、『惚れ薬』とか『水晶玉占い』と書いてありました。たくさんある中に『なりたいものになれる魔法』だけが光つて見えました。胸がドキンと高鳴りました。

「さて！ まずはどの魔法からいくとするかね？」

おばあさんが言うと、すかさず私は答えました。

「私はなりたいものになれる魔法がいい！」

「それは、上級魔法使いじやないと使えんのよ。」

と言われてしまつた。がつかりしたけど、魔法が使えるようになるならそれでOK。

「じゃあどんな魔法だつたらできるの？」

と聞くと、

「そうだねえ、まずは、『思い出し魔法』からかねえ。」

と言われて

「初心者用魔法が決まつていてるなら、『どの魔法から行くとするかね？』って聞いた意味ないやんけー！」と私は思わず心の中で突つ込んでしまいました。どうとも知らず、おばあさんはどんどん教えてくれました。

「まず、思い出し魔法というのは、時が経つて忘れてしまつた物事を思い出すことができるという魔法だ！ 呪文は、シンガネサ・メク・エルドだよ！ さあ、そこにある魔法の杖を持つて。よし、言つてみな！」

私は、杖を持ちすぐに呪文を唱えました。

「シンガネサ・メク・エルド！」

すると、私が四年生の時に苦戦し、今でも超苦手な二桁割る二桁の筆算方法を思い出しました。呪文が成功して嬉しい半面、永遠に避けて通りたかった問題が頭に浮かび、しんどくなりました。すると、心を読んだらしきおばあさんが、爆笑しながら「思い出せたならラッキ

ーじゃないか！ テストのときには使っちゃあいけないよ。」

「えー！ テストで使わずにいつ使うん！？」

そっぽやく私を見て、おばあさんはしばらく笑い続けていました。こうして私の魔法使い修行1回目が終わりました。

次の日、

「昨日のおさらいもちゃんとできたし、次は炎を杖先から出す魔法をしようか。」

とおばあさんが言いました。なんだか昨日よりも張り切つているように見えました。

「呪文はインセンデント・ファイヤーだよ。炎の魔法はいろいろな場面でとても便利に使えるよ。」

「あっ、この前みんなで花火をしたときに誰も火を持つてなくてこまつたんだよね。更に、タバコを吸う人に借りようとしたけど、今は電子タバコの人が多いから、保護者も誰もライター持つてなくて大変だつたんだあ。そんなときにはこの魔法があれば…。」

「便利だけど、その分気をつけないといけないよ。ケガをすることやさせることがないようにね。」

私は、昨日の魔法で成功していたから、私には何でも出来るような気になつていて油断していました。そんなどだから、

「インセント・ファイヤー！」

呪文を言い間違えてしましました。炎は出ず、私の顔面の目の前で、ボフッ！ と大きな音がして煙が辺りを包みました。幸い、ケガはなかつたけど、私の大事な前髪がチリチリになつてしましました。

「だつ、大丈夫かい！？」

おばあさんは最初は心配していたけど、私にケガが無いことが分かると、私の顔を見て、大笑いしていました。「何でそんなに笑うのさあ」と思つたけど、鏡を見て真っ黒の顔とチリチリの前髪に自分でも笑つ

てしまいました。

「三日目はすり傷を治す魔法でした。

「えーっ！？何！？早口言葉！？？」

昨日の失敗を思い出して、いきなりやつてみずに、何度も呪文を言う練習をすることにしました。でも、舌を噛みまくつて、言えた頃にはベロがジンジンしてました。

「インファルミダ・バリンカ・バリオジエン！」私は、魔法の杖をふりながらカツコよく言いました。しかし、けが人はいないので何も起こりませんでした。

「おばあさん、今コロナが流行っているけど、魔法で直せないの？それが出来たら、もしかかっても休まずにすぐに学校に行けるからいいなと思って。」

私はおばあさんに聞きました。するとおばあさんは「それはいい考えだね。でも、何人の魔法使いが研究しているんだけど、まだその魔法は完成していないんだよ。」

「そうなんだあ、残念。」新しい魔法を研究して、生み出す人がいるなんて初めて知つて、私はまたわくわくした気持ちが止まらなくなりました。

四日目、「今日は瞬間移動魔法だよ。これが出来るようになれば、私がわざわざ迎えに行かなくても、自分でここに来ることが出来るようになるよ。がんばりなつ！呪文はアナク・ゾイケ・ダボダイだよ。」「ハナクソ？？」

私は、何回聞いてもハナクソにしか聞こえなくて、面白すぎる呪文に笑いすぎてお腹が痛くなりました。笑いがおさまらない私を見て、おばあさんは一人でティータイムに行

つてしまいました。二十分後、おばあさん戻ってきたころにはようやく笑わずに魔法を言えるようになつていました。

「アナク・ゾイケ・ダボダイ！」

魔法は成功し、私は自分の部屋にもどつていました。そして、もう一度魔法を唱えると、またおばあさんの家に辿り着きました。

「やつたあ！！これで行きたいところどこにでも行ける！」

「残念だけど、事前に魔法陣を描いたところにしか行けないからね。」すかさずおばあさんが言いました。

「なんだ、ディズニーランドに行きたかったのに。」

一瞬がつかりしたけど、今の私にはディズニーランドよりも魔法修行の方が魅力的だから、そこまで落ち込んでいない自分に気がつきました。

こうして私の魔法使い修行は始まりました。毎日、暇さえあればおばあさんのところに行つて修行していました。不思議とどんな大変なことでも辞めたいとは全く思ひませんでした。

二学期に入つて、終わつていなかつた宿題「将来の夢」は、先生の配慮で出さなくとも怒られませんでした。

修行を続けて二週間ほど経つたある日のこと、私が布団で寝ていると、シンデレラの夢を見ました。夜中の十二時に魔法がとけて、馬車はかぼちゃに戻り、馬もネズミに戻つてしまつた。そのとき、丁度柱の振り子時計が九回鳴つて目が覚めました。私は魔法がとけて元通りの西山姫花に戻つているかもと思つてドキドキしました。

「こんなことなら、ガラスの靴を履いておけばよかつた。そうしたら、ハッピーエンドになつたのに。」

私が独り言を言つていると、なぜかおばあさんが現れて、
「何を言つてゐるんだい。あんたはシンデレラじゃなくて、シンデレラにガラスの靴を履かしてやる魔女じやないかい。誰かが何とかしてくれるなんて思つちやいけないよ。魔法使いは『人のために』と思つ

て修行するんだよ。これまでにたくさん魔法使いを見てきたが、自分の利益のために頑張っていた子達は、みんないい魔法使いにはなれずじまいに辞めちましたよ。『人のために努力するのが一人前の魔法使い』なのさ』

「人のために？」

「そうさ。それが一番大事なのさ。」

私は、今までに自分が魔法使いになりたいと思つていただけで、人の役に立つことなんかこれっぽつちも考へていませんでした。魔法使いは、自分の願いをかなえるものだと、ずつと思つていました。

「私の夢見た魔法使いは、みんなを幸せにする仕事だつたんですね。」私が言うと、おばあさんは嬉しそうに笑つた。

九月も終わり、少しだけ冷たくなつた風が教室を通り抜ける。放課後、私は先生のところへ行きました。

「先生、「将来の夢」の作文、遅くなつてすみません。『ちゃんと書いてきたんだね。読ませてもらうね。』

先生は優しく微笑みました。

私の将来の夢

西山 姫花

私の将来の夢は、人の役に立つことです。これまで、自分のことばかり考えて行動していました。すると、周りの大切な人たちを困らせたり、悲しませていることに気がつきました。だから、家族や友達、会つたこともないような人まで、みんなを笑顔にできるような大人になりたいです。

こうして私が夢見た魔法使いになるための修行は続きます。みんなを幸せにするために努力できる、一人前の魔法使いになるために。そ

して、いつか魔法使いがみんなから認められる社会になるようにするためには。

